

vol.13

選書者：霍見真一郎

(神戸新聞報道部デスク兼論説委員兼編集委員)

●『台所のおと』 著者：幸田文

日本語のやわらかさと芯の強さを教わった短編集。筆者の紡ぐ背筋の伸びた美しい言葉には、しみさえ感じる。本が着物を着ているようだ。とりわけ収録作「祝辞」は何度読んでも胸につまる。「文ちゃん」と呼んでいたほど、高校時代の私にとってアイドルだった。

●『風の歌を聴け』 著者：村上春樹

人気作家が世に出した最初の一冊。文庫版の薄さと中身の深さのギャップがいい。数十回は読んだ。彼が育った神戸・阪神間が一人称で淡々と描かれ、初期三部作が幕開けする。このシリーズを読んだ後は「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」がおすすめ。

●『若き実力者たち』 著者：沢木耕太郎

稀代のインタビュアーのデビュー作。時代の寵児が目の前で語り出す。色彩と輪郭に特徴がある画家アンリ・マティスのように、人生のシワまで鮮やかに描く力は、「文筆」による肖像画家のようだ。後の代表作「深夜特急」を世に知らしめた職人技の原点が、ここにある。

●『戦争と罪責』 作者：野田正彰

読むのが苦しい。戦後世代は、戦時中を生き残った人々に、「空襲の恐怖、疎開や引揚げの苦労話だけでなく、あなたは戦争時に何をしていたのか、何をしたのか、聞きはしなかった」と筆者は指摘する。侵略戦争での「殺人」を告白する老人たちの声。目を閉じて耳を傾ける。

●『海のアトリエ』 著者：堀川理万子

なぜか泣けてくる絵本だ。子どもが絵描きの知人宅で過ごした1週間の思い出が淡々と流れていく。読後の自分がうれしいのか哀しいのか、分からない。ただ、解放感と、人生は「感じる」ことでできているという確信が残る。汽笛が聞こえる神戸の図書館で読みたい。